

危機の詩人 ヘルダーリン

(Dichter in Krisen)

平野篤司

「だが、危険のあるところ、救う力も生まれる。」¹⁾(パトモス)ここに語られているのは、ひとが神的なものに触れるときのことなのだが、危険があるにもかかわらずではなく、危険があればこそ救済が生まれるという逆説的な思想である。当然詩人は、安全な場所にはいない。絶えず捨て身の跳躍を実践している。しかし、軽やかな跳躍というわけにはいかない。落下は必定である。「ヒュペリオンの運命の歌」において「水のように岩から岩へと投げ出され、定かならぬものへと落ちていく」²⁾とうたわれる人のありようというのは、こうした定めを負ったものということである。だが、救済があるとすれば、もちろんあるとは限らないが、まさにこのような運命を担う自覚を持ち、それを実践的に生ききる覚悟を固めたものに対してであるのだろう。ヘルダーリンは、危機の詩人といえるだろう。それは、フランス革命前後のドイツを幾重にも襲った危機というだけでなく、詩人の内面での精神上的危機でもあったはずであるが、それらが共振して起こったということが詩人にとっては抜き差しならぬことであり、何よりもそれは、詩のなかに集中して現れている。このような事態を知るためには、彼の極度の緊張状態にある詩語に耳を傾ければよい。その緊張こそ、まさに危機そのものを伝えているのだから。

19世紀ドイツの歴史の歩みは、文化史の上でビーダーマイアー (1815-1848) と呼ばれる反動と安定期がおよそ前半、ニーチェ (1844-1900) の時代がその後半といってよいだろう。ビスマルク主導のドイツ帝国の成立が1871年であるが、19世紀を通じてドイツはおおむね上昇機運にあったといえる。だが、その間に人々を取り巻く内外の危機は着実に深化し、ついに20世紀に入り、第一次世界大戦で臨界点を迎えるのである。

もちろん人々は、単に安逸をむさぼっていたのではない。ハイネやニーチェのドイツ批判は、辛辣かつ激越なものであったことは、よく知られている。そして、まさにこの臨界点に向ってヘルダーリンの評価の機運は高まっていくのである。

1843年の詩人の死後、1867年のディルタイによる詩人を俯瞰するような詩論³⁾は、きわめて早期における例外的な再発見の記念碑的な業績であるが、それを別にすれば、本格的な評価の動きは、19世紀末ニーチェの最晩年の頃からである。ウィルヘルム・ベームは、1905年に三巻本のヘルダーリン選集⁴⁾を編集出版しているが、これにはテキストや書簡など資料の点で改定ならびに増補が必要であった。当時から完全な全集とはいえなかったのである。つぎに、ウィルヘルム・ミヒェル(1877-1942)が1911年に初めてまとまった評論集「ヘルダーリン」⁵⁾を公刊しており、彼は、終生この詩人に熱いオマージュを捧げていることを挙げなければならない。その結晶は、詩人の死後百年忌に当たる1943年刊の遺著「ヘルダーリンの回帰」⁶⁾であろう。しかし、自身認めているように、彼はドイツ文学研究の学徒ではなく、作家だったのであり、彼のヘルダーリン研究は、私的な、だがそれ故に思いのこもった詩人への賛歌であったというべきである。むしろかれの詩人との取り組みにおける最大の功績は、もう一人のヘルダーリン再発見の先駆者ノルベルト・フォン・ヘリングラート(1888-1916)との出会いである。ミヒェルは、ヘリングラートが賞賛しているように(ヘルダーリンについて)「一度は語られなければならぬ本質的なことがらを初めて語った」⁷⁾のである。そして、本格的な詩人の全集を刊行するべく構想し、その実現のための準備を整えていたのも彼である。その作業の初期段階で年下の若き学徒、ヘリングラートとの共同編集も予定されていたのである。だが、それは、早々とヘリングラート一人の手に委ねられる。ヘリングラートからのいささか強引とも思われる要求によってであり、ミヒェルはあっさりとしてヘリングラートに譲っているように見えるが、その経緯については、いささか人をはらはらさせるものがある。ヘリングラートの側では、この段階ですでにヘルダーリンを宿命的な自分の詩人として捉

えていたのであろう。もちろん大変な自負もあって、この仕事を自身固有のものであり、いかにミヒエルが篤実な人柄の研究者であっても、彼との共同作業には任せられないと判断したのだと思われる。敬愛する先達との共同作業の約束を反故にしてまで、彼個人にとって運命的な課題を見出したということだと思ふ。これは、後のヴェルダンでの戦死によって突然に断ち切られた短い生涯と業績を思うにつけても不可避的な果断だったといえるだろう。いっぽう、ミヒエルの潔い身の引き方にも感心させられるものがある。彼は自身文献学者でないことを心得ていたし、若き畏友の出現とその情熱にこころ打たれたのだと思ふ。それ以後発表された彼のヘルダーリン論は、全てヘリングラート版に拠っているのである。このひとの謙虚な人柄と対象に対する愛着の深さについては、たとえばルドルフ・アレクサンダー・シュレーダーの縷々述べるところである⁸⁾。

いずれにしても、この二人の出会いによって本格的なヘルダーリン全集の礎が築かれたのである。ヘリングラートは、ミヒエルとの別離のあと、先達ベームや後に彼の片腕となったフリードリヒ・ゼーバスとのやり取りを通じてテキスト編集に没頭する。この両者との交流は、ミヒエルの場合とは異なって、狭義の文献学的な、さらに言えば専門技術的な性質のものであった。ゼーバスなどは、後年になって、自分は文学的な面ではこの仕事にほとんどかわりはなく、ひたすら文字の読み取りと校正に徹したという趣旨のことを語っている。解釈は、ヘリングラート固有の仕事だったのだろう。一方、詩人研究に内在するテキストの厳密さ正確さが要求された。このような作業は、ヘルダーリン研究の根幹をなすものはずである。おそらくその精神は、現在も刊行が続行中のフランクフルト版にも受け継がれているのである。そこでは、ファクシミリ版をもとにしながら、細大漏らさず出来る限りあらゆるステージのヘルダーリンの言語の軌跡を跡付けようとしているが、まさにこのプロセスが、詩人の宇宙生成の展開を知る方法となるからである。フランクフルト版は、たしかに内容、形式の両面で実用向きではない。だが、それを補って余りあるものがここにはある。それは、詩語生成というこの詩人特有のありようを解き明かしてくれるか

らだ。ヘリングラートが実質的にも、精神的な意味でもこのような篤実な仕事の第一歩を踏み出したことの意義は大きい。

かれは、学生としてミュンヘン大学でヘルダーリンとの接点をつかむが、その道行きは、まさに必然的に定められていたともいえよう。導きの手は、指導教授フリードリヒ・フォン・デア・ライエンによって差し伸べられた。以下は、ライエンのヘリングラート回顧の講演⁹⁾による。ライエン教授は、若きヘリングラートの博士論文のテーマとして、それまでほとんどアカデミズム内における評価の対象外だったヘルダーリンによるギリシャ悲劇「オイディプス」、「アンティゴネー」のドイツ語翻訳の真価という課題を提案している。ヘリングラートがギリシャ古典およびドイツ古典派、ロマン派に傾倒していることを見ての判断であるが、慧眼といえよう。ヘリングラートにはインマーマンの「メルリーン」という長年温めてきた愛着の対象があったのだが、インマーマンよりもヘルダーリンの優位性を説き、若き学徒を宿命的なテーマに向わせたのがこの恩師であった。ヘリングラートのヘルダーリン研究の主眼点がどこにあったのかは、その断ち切られた人生のゆえになかなかつまびらかにしえないが、ギリシャ古典とドイツの接点はその中心的な位置を占めることに違いはなかりょうと思われる。ライエンは、「だれもヘリングラートほど至福にめぐまれたものはいなかったろう。いまや、彼は自分を十全に満たす課題を持ったのであり、自分のギリシャと自分のドイツを持つことになった。」¹⁰⁾と語っているが、これは、ピンダロス詩篇の翻訳をヘリングラートがシュトゥットガルト国立図書館で手稿の中から発掘したことをさす。ヘルダーリン再発見史上でも第一等の重要性を持つ事件であった。詩人の死後数年してクリストフ・シュワープの手により出版された作品集¹¹⁾のなかで、ヘルダーリンがピンダロスの翻訳をしていたという記述に接したヘリングラートは、幾多の困難をのりこえて発掘したのである。これにはもちろん、ギリシャ古典研究学徒としてのヘリングラートのピンダロスへの賞賛の念が原動力として働いている。ヘルダーリンの後期の讃歌に正当な評価の光がさしたのも、ヘリングラートのこの業績を出発点としている。こうして、ヘリングラートの

なかで、古典ギリシャとドイツ文学の世界がヘルダーリンという点に収斂してひとつに結ばれたのである。

さらに、ヘリングラートは、もうひとつの重要な架橋を築いている。それは、ヘルダーリンをゲオルゲクライスと結ぶことになる。ヘリングラートは、1910年ピンダロスの翻訳をシュテファン・ゲオルゲの主宰する「芸術草紙」に発表している。それ以前からヘリングラートは、ゲオルゲを「厳格な魔神」¹²⁾と呼び、詩神として賛仰し、崇めており、彼をたたえる詩篇三部作まで作って捧げているほどである。ヘリングラートにとってゲオルゲは、単なる詩人ではない。彼は、たとえば、ホフマンスタールのようなもっと巧みな詩人はいるかもしれないが、「ゲオルゲの口からは神が、人類にたいする神託が語り出す」¹³⁾(ヘリングラート)というのである。これとちょうど同じ口吻で、尊崇の念をもってヘルダーリンとニーチェをも取り扱っている。まさにこのような賛仰の相手に対して、もう一人の詩神ヘルダーリンの真正な詩語を献呈するということがいかにその使徒として崇高な仕事であったことか。かれのヘルダーリンのテキスト校訂および編集への熱意は、このような使命感に支えられていたであろうことは、想像に難くない。ヘリングラートは、ヘルダーリンのピンダロス翻訳原稿をシュトットガルトで発見してから、ゲオルゲクライスの中枢にいたカール・ヴォルフスケールにそのことを伝え、彼を通してフリードリヒ・グンドルフとの交流が生まれる。ヘリングラートのこの先輩両者との書簡のやりとりには、文学上の友情という点でも類まれなものがある。ゲオルゲ本人ともミュンヘンのヴォルフスケールのもとで繰り返し出会う機会もあったようである。ゲオルゲが次のように述べる時、それと明言はされてなくとも、そこにヘリングラートの献身的努力が生かされているのを看取するのは、不自然なことではないと思われる。

「初期のヘルダーリンはゲーテの時代（すなわちゲーテ・シラーの古典主義の世代）に属している。そして彼の後期の詩作品　今ようやく人々が理解しはじめたその詩形象においては、彼は、はるかな将来を持つ一つ

の精神血統の創始者である。ヘルダーリンの詩が含む最良のものを高く評価しえなかったところの、古典派の巨匠たちは、彼ら自身の課題に専心していた。その課題とは彼ら自身と、彼らの同時代人たちとを、野蛮な混乱と衝動に駆られている騒擾との状態から、古代ギリシャの明証へと高め清める仕事であった。造形的な諸芸術のなかに、彼らはもっぱらアポロ的なものだけを留意した。むしろ彼らは、すべすべと平板に磨き上げた模造品の中からアポロを感じ取るほかはない立場にいた。……なるほど、古代ギリシャの悲劇作品は取り上げられ顧られたが、ピンドロスはほんの少しのあいだだけ不徹底に考察され、そして、抽象概念の思索家としてではないプラトン　　そういうプラトンは敬遠されていた。ディオニゾスとオルフォイスは今なお埋没し忘れられていた。そしてただヘルダーリンだけがその発見者であった。彼は、なんら外からの示唆を必要としなかった。内的なヴィジョンが彼の助力者であった。」(ゲオルグ「ヘルダーリン」¹⁴⁾)

そして、ライナー・マリア・リルケの場合もヘルダーリンを知るきっかけは、やはりヘリングラートであった。1915年ミュンヘンにあった一種の文化サロン、ブルックマン家でひらかれた数度の講演会でヘリングラートは、ヘルダーリンについて話をしている。リルケのほうも「ヘリングラートの講演が自分にヘルダーリンへのみちを用意してくれたのだ。」¹⁵⁾と認めている。そして、リルケもヘルダーリン頌をあらわし、彼にしてはかなり率直にヘルダーリンから受けた感銘を形象化している。この「ヘルダーリンに寄せて」¹⁶⁾は、しかし、単なるオマージュではなく、真正な詩人が真正な詩人を真剣に受けとめて生まれた作品となっており、それは紛れもなくリルケであり、同時にヘルダーリンでもあるような共鳴の世界である。

「私たちにはとどまることは許されない……」

この地上では

落下こそもっとも有為のわざだ。すでに成就された感情から
予感された感情へまっしぐらに進んでやまない。

あなたにとって、かがやかしい人よ、あなたにとっては、巫術のひとよ、
ひとつの生命の全体が、あなたがそれを口に出すとき、突き進む形象と
なったのだ、

詩の行は運命のように閉じ、もっともおだやかな行のなかにも
死は存在していた。そしてあなたは死の境に踏み入ったのだ。とはいえ
先立つ神があなたをかなたへ連れ去ったのだ。

おお変容する精神よ！だれにもまして変容をこのむ精神よ！……」

(リルケ「ヘルダーリンに寄せて」¹⁷⁾)

地上の存在として、死を前提とした生のありようを見極め、一箇所にど
どまることを許されず、たえず果敢に変身を求めてやまぬヘルダーリンの
精神がくっきりと造形されている。「突き進む形象」とは、ヘルダーリン
の形象化を捉える点で、その言葉遣いの的確さに驚嘆を禁じえない。ブル
ックマン家での若きヘリングラートの講演のいかなる点に感銘を受けたの
かを知る由もないし、これは晩年の作品でもあるのでその後のリルケの成
熟ということも当然勘案しなければならないが、初期の出会いがヘルダー
リンとリルケを確実につないだことは事実であろう。

リルケには、初期の作品として「旗手クリストフ・リルケの愛と死の
歌」¹⁸⁾がある。インゼル文庫の第一巻として出されたこの小品には、リル
ケ自身不満を感じていたというが、リルケの著作としては、最も売れ行き
のよかったものだったということだ。しかし、これがリルケの名を高から
しめたのは事実であろうが、これをもってリルケの詩人としての確立期の
記念碑的作品としてとらえることには、無理があるだろう。やはり、リル
ケは詩人として努力と修練によって自己を鍛えてゆくタイプであったのだ。
この作品が人口に膾炙したのには、時代の様相が深くかかわっていたので
ある。一般の目に触れる形としては、この作品は決定稿が1906年にアクセ

ル・コンカー社から、そしてインゼル版が1912年に出されたが、これはまさに第一次大戦の前夜といってもよい時期に当たる。時代は現代ではなく17世紀半ばに設定されていて、オーストリアの対オスマントルク防衛戦のさなかハンガリーの荒野で斃れた戦士が主人公である。かれはリルケを名乗っており作者リルケの先祖の一人ということである。後のリルケに特徴的な構造的な重層性はほとんど窺えないが、それなりに印象的な作品ではある。表現主義的な筆致も交えながら、戦地での愛と死、そしてうつつと夢まぼろしの双方の世界が対位的に織り交ぜられて、抑制のきいた調子で一種劇物語風に展開されていく。この作品が世に受け入れられたということは、しかしながら、明快さ、印象の鮮明さを持つその作品自体によるというよりも、やはり、時局であろう。これは、一般の読者に受け入れられたばかりではなく、若者によって支持された。じじつ、第一次世界大戦に従軍した多くのドイツ兵が出陣に当たってこのインゼル文庫をその背囊に忍ばせて、戦線へ向ったという世によく知られたエピソードがある。リルケ自身アンドレ・ジイド宛の手紙において、この作品に関して次のように書いている。

「まだ子供らしい頬をほてらせながら、死を、死の神格化を見出そうとして愛をつきぬけていく、この若い祖先の迅速さに驚き、ほとんど我を忘れて恍惚とし、幻惑させられたのであります。」¹⁹⁾

やはり、作品は根本的に非常に強い感動に裏打ちされているのである。この作品は、リルケがヘルダーリンを知る以前に書かれたものであり、ヘルダーリンと現実的なつながりを持つものではない。しかし、1899年にベルリンで書かれ、1912年にインゼル文庫の創刊第一号として出版されたものであること、1914年に勃発した第一次大戦中に当時の若きドイツ兵たちに熱烈に愛読されたこと、そして1915年にリルケがミュンヘンでヘリングラートのよるヘルダーリンに関する講演を聴いて感銘を受けていることなどを考え合わせてみれば、ひとつの濃厚な時代の雰囲気立ち上って

るのではないか。

これは、疑いもなく危機の時代の兆候なのだ。そして、このような雰囲気とともに、ヘルダーリンの受容の機運は熟していったのではないか。やがて、第一次大戦は終息し、その結末はヨーロッパ、とりわけドイツの破局に終わるが、まさにこのころから一世紀以上も昔の詩人ヘルダーリンへの関心が高まるのである。それは、なによりもヘルダーリンの文学そのものの輝きの発見、そして、それまでこの詩人がそのあまりの先駆性の故にか等閑視されてきたこともその要因であっただろう。しかし、それとともに忘れてならないのは、危機の詩人としてのヘルダーリンの文学の持つ際立った特性である。安定した現実ではなく、現実が転覆されざるを得ない状況でこそかれの詩語は屹立し、輝く。19世紀をつうじてヘルダーリンがほとんど忘却の淵に沈められ、19世紀から20世紀にかけての時代の転換期に再発見されたということは、そのような詩人の本質をよく物語っているといえよう。

ヘルダーリンという詩人は、徹頭徹尾詩人であったというほかはないのだが、時代と深く厳しく切り結んだ詩人だったのだ。フランス革命からナポレオンの時代にかけてのドイツの閉塞的な状況に強いられたのである。また、より根源的には、地上に生きるということを根本的に問う詩人であったということだ。当時としては未曾有の混乱と危機のなかで、この詩人はより根源的に、また、より普遍的に地上における人間存在のありようを追究したといってもよい。その認識の基本には、人間存在というのは、根本的に危機の上に成り立つものだということ、ひとは危機と危機のあいだの深淵をたえず跳躍していくべきものだということ、すなわち絶えざる変容を遂げるべき存在だということ、そして没落を運命付けられていること、などはなはだ悲劇的な世界観がある。このような世界観が生まれた場は、やはり詩人が生きていた危機の時代であろう。ただほかの同時代人には、なかなか危機というものが感受できなかったのだ。これは、危機の詩人こそが他者にはるかに先駆けて感得したものである。かれは、同時代はおろか、およそ一世紀に亘っても理解されることはなかったほどの先駆者

であった。そしてそればかりではなく、その先駆性を精神の闇をもって贖わなければならなかったのだ。

しかし、詩人の真価が発揮されるときが来る。ゲオルゲは、ヘルダーリンを「彼の民族のための大いなる見者」²⁰⁾「次に来るドイツの未来の礎石であり、あらたな神の告知人」²¹⁾とよんでいるが、その未来は必ずしも明るくはない。なぜなら、それは、再び危機の時であろうから。20世紀の初頭がそのひとつであった。第一次大戦を臨界点とするドイツの危機である。ここで間違いなく詩人の蘇りを果たすのに貢献したひとりとして再びヘリングラートの名を挙げなければならない。かれが敢行したのは、詩人のテキストの編集だが、それは同時にドイツ人にとっての真の危機を告知知らせることであったのではないか。若き学徒は、1916年その仕事に本格的に着手してからわずか数年で、祖国ドイツ破局の戦塵に散ってしまったのである。身をもって危機を生きただろう。しかし、かれのおかげで詩人の言葉は、真正な姿でよみがえることになったのである。危機のなかでヘルダーリンを生かすことがヘリングラートにとって救済につながったかどうかは分からないが、祖国の人々にこれほどの贈り物をなしえた人がほかにいるだろうか。

ヘリングラートの死後、ヘルダーリンのテキスト編集は、ゼーバスおよびルートヴィヒ・フォン・ピゲノーらに受け継がれ1923年に完成、6巻本の全集として出版されている。いわゆるヘリングラート版である。その後、ヘルダーリンは、大戦による破局後のドイツの危機の中でますます評価を高めていく。1920から1930年代にかけては、もうシラーなどと並ぶ、あるいはそれ以上の国民詩人であった。テキストのほうは、ヘリングラート版の遺漏を補うべく、はやくも30年代の初めころからシュトゥットガルトにおいて大規模な全集版の計画が立てられ、世紀の事業として実行されていく。これは、若き文献学徒フリードリヒ・バイスナーの手に委ねられた。バイスナーは、篤実な校訂者であって精力的に取り組むことによって、1943の年ヘルダーリン百年忌に後に全集となる第一および第二分冊の公刊を実現している。しかし、この作業もナチズムの支配下および戦時下という危

機のもとに進められたのであり、これと連携する形でゲッベルス庇護の下ヘルダーリン協会が設立されるなど、禍々しい事態を迎える。これは、ヘルダーリンがナチズムの興隆とともに憂国と救国の民族詩人、民族の精神的守護神として、あえていえば政治の舞台において崇め奉られたということである。1942年に出されたシュトゥットガルト版のための作業報告書には、「戦時において学術活動が進捗することをのぞまれるのが総統の意志である²²⁾」と書かれ、完璧を目指して資料の提供を読者に呼びかけている。

また1943年6月7日の詩人の百年忌の命日のために出版されたクルックホーン編による「ヘルダーリン」と題する記念論文集²³⁾は、ワインハーバーの愛国的なヘルダーリン頌詩を巻頭に置き、ガーダマー、レーム、W. F. オットー、ベーム、バイスナー、ハイデガーらの錚々たる面々の詩人論およびテキスト論を配している。当時のドイツ精神界あげての詩人の捧げる熱烈なオマージュとなっているのである。

これらのことは、ロベルト・シューマンのヴァイオリン協奏曲（1853年完成）の初演にまつわる諸事情をも連想させる。ドイツにおける公式の初演は、1937年おなじくゲッベルス臨席のもと、ベルリンにおいてナチスの威信をかけた催しとして、ドイツ人ヴァイオリニスト ゲオルク・クーレンカンブ独奏、ハンス・シュミットイッセルシュテット指揮ベルリンフィルハーモニー管弦楽団によって行われている。ゲッベルスは当日の挨拶においてこの作品を「真正なドイツのヴァイオリン協奏曲²⁴⁾」とよんでいる。これは、ユダヤ人作曲家メンデルスゾーンの名高いヴァイオリン協奏曲を押しつけてという意味である。

このようにヘルダーリンもシューマンも危機の時代にのみこまれ、またそれを映し出す鏡となったのである。栄光と悲惨を一身に身にまとった受難者を目の当たりにしているようではないか。ヘルダーリンにあっては、詩人自身の内的な危機が外側の危機的な出来事と連動する。そのたびごとにドイツの人々は、詩人の言葉によって覚醒させられ、自らの文化の命運について考えさせられずにいられないのである。

バイスナー編集によるシュトゥットガルト版の本格的な出版は、二次大戦

後の1946年に始まり，1985年まで続いている。これは，70年代半ばになって D. E. ザットラーらによってそこに第三帝国の残滓があることを指摘され批判を受けるが，テキストの真正さにおいて疑わしい点はない。この批判は1960年代の後半から興った新左翼運動とも連動するものであった。やはり時代の緊張を背景としている。その後そのザットラーのより科学的実証的で厳密な方法による新しい全集²⁵⁾が1975年から開始され，現在も継続進行している。

註

- 1) Friedrich Hölderlin: Patmos, 379
- 2) Hölderlin: Hyperions Schicksalslied, 229
- 3) Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung 所収の Friedrich Hölderlin 論
- 4) Wilhelm Böhm: Sämtliche Werke
- 5) Wilhelm Michel: Friedrich Hölderlin, 1912 Wien
- 6) Wilhelm Michel: Hölderlins Wiederkunft, 1943 Wien
- 7) Norbert von Hellingrath
- 8) Rudolf Alexander Schneider, 1943 Wien
- 9) Friedrich von der Leyen: Norbert von Hellingrath und Hölderlins Wiederkehr, Hölderlin- Jahrbuch 1958-1960
- 10) ebenda
- 11) hrg.von Christoph Schwab 1846
- 12) Ludwig von Pigenot: Briefe aus Norbert von Hellingrath S. 106
- 13) Ebenda
- 14) みすず書房刊 片山敏彦編訳「ドイツ詩集」による。
- 15) Ludwig von Pigenot: a.a.O
- 16) Rainer Maria Rilke: An Hölderlin
- 17) 白鳳社刊 神保光太郎編「ドイツ詩集」所収 生野幸吉訳による
- 18) Rilke: Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke, 1912
- 19) 弥生書房版「リルケ全集」第一巻による
- 20) Stefan George: Hölderlin による
- 21) ebenda
- 22) Die Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe Ein Arbeitsbericht, 1942 Stuttgart S. 17
- 23) Hrg.von Paul Kluckhohn: Hölderlin Gedenkschrift zu seinem 100. Todestag 7. Juni 1943, 1943 Tübingen

- 24) Robert Schumann: Violin Concerto in D minor, 20 December 1973 Georg Kulenkampff Berliner Philharmoniker Hans Schmidt-Isserstedt, 1994 TELDEC 版 CD のライナーノートによる
- 25) herausgegeben von D. E. Sattler, Friedrich Hölderlin: Sämtliche Werke, Frankfurter Ausgabe